



Title	篆隸万象名義の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	李, 媛
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12517号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65754
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Li_Yuan_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 李 媛

主査 教授 池田 証 壽
審査委員 副査 特任教授 小野 芳彦
副査 准教授 松江 崇

学位論文題名 篆隸万象名義の研究

この論文では、日本の平安初期に編纂された漢字字書である『篆隸万象名義』を対象にして、文字学と情報処理学との二つの観点から本文解読にアプローチした。『篆隸万象名義』は、9世紀前半、唐から日本に戻った弘法大師空海が、梁・顧野王撰述の原本『玉篇』を抜粋した字書である。約16,000字の掲出字に対して、字音・字義・字体の記述を収録する。原本『玉篇』は、後の時代の日本古辞書編纂に大きな影響を与えたが、現在では逸書となっており、日本に八分の一しか残存しない。『篆隸万象名義』は、原本『玉篇』を再構するための重要な資料であると同時に、日本語学においても字音・字訓・字体を考察する基礎資料となる。しかし、『篆隸万象名義』は永久二年(1114)に書写された高山寺本しか存しない。高山寺本には誤写・誤脱が多いことが早くから指摘されており、利用するには精密な本文校訂が要求される。『篆隸万象名義』の研究を行うには、関連する資料群の内容、本文の構造・部首体系・内容、先行研究の成果を適切に整理・分析し、それらを総合することが必要である。従来古辞書研究は、書誌学・校勘学を踏まえた伝統的な文字学的手法に則ることが多く、情報学からのアプローチは少ない。従来方法では、追跡調査に多大の時間と労力を必要とするが、情報学の知見と方法は、こうした難点を克服する上で大きな役割を果たす。一方で、古辞書研究である以上、第一次資料を蒐集・確認するには、文字学的な手法によるほかはない。本研究では、従来型の方法論で、研究資料を確保、解読した上で、情報処理学の観点から内容の整理、データの分析を行うのが有効であろうとの考えに立ち、文字学と情報処理学からのアプローチを組み合わせた二種の研究方法を総合して、『篆隸万象名義』の本文研究に取り組んだものである。

『篆隸万象名義』の本文研究は、日本において、1977年に出た白藤礼幸氏と宮澤俊雅氏による成果、それを踏まえた1986年の上田正氏の成果が大きな到達点であったが、今世紀に入り、中国での研究が格段に進み、呂浩氏による成果が2007年に公刊されるに至った。しかし、日中の研究成果を相互に参照してさらに発展させる研究は現れていなかった。

本研究の意義の第一は、これまでの日中の研究の成果を踏まえて本文研究を進め、掲出字に関して埋字・脱字・重出字の分析を行い、全掲出字の算出方法を明確にした点である。とりわけ埋字と脱字に関する分析は秀逸で、第10回漢検漢字文化研究奨励賞を受賞している。

第二は、情報学の観点からの成果として、誤写・異体字の多い古写本を解読し、Unicodeによる電子テキスト化とその公開を実現した点である。『篆隸万象名義』の現存唯一の古写本である高山寺本には誤写・異体字が多く、本文解読は困難を極めるものであるが、それを克服して電子テキストを作成し、所蔵者の許諾を得た上で公開した。この成果は、人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2016」の学生奨励賞と最優秀論文賞を受賞している。

第三は、書誌学・文献学の観点からの成果として、『篆隸万象名義』の近世写本の価値と意義を解明した点である。従来、『篆隸万象名義』の近世写本は、唯一の古写本である高山寺本の単なる写しと見られ、その内容についてまったく調査研究されていなかった。宮内庁書陵部、京都大学附属図書館、北京の中国国家図書館古籍館、台北の国立故宫博物院文献館・国家図書館善本書室に所蔵される近世写本を実地に調査し、現在の高山寺本に錯簡があることを近世写本との照合により解明し、

この事実から近世写本は、修理前の高山寺本を模写したと推定する。さらに、近世写本が修理前の高山寺本の本文を伝える点で本文判読の上も有益であるとしたのである。

審査を通して明らかになった問題点としては、音韻に関する分析と説明に不足する点、先行研究の参照に遺漏ある点が指摘された。特に重出字の分析において、明らかに別音の反切を注記するものを重出字と扱い、多音字のためにこうした事例が生じたとした。この解釈は確かに一案ではあるが、各種の字音資料を参照した上で、より緻密かつ確実な論証が求められるものであろう。この点は、今後の研究によって解決が可能であり、先行研究との関連では、高山寺本の原本調査を踏まえた本文解読の成果をテキストデータベースとして公開した点は、他に類例のない成果と判断された。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。